

信じる道をひたすら歩むのみ

浅井 春夫

(福祉学科教員)

コミュニティ福祉学部での19年間は、本当に幸せな教員生活、研究者生活を送らせていただきました。コミ福のみなさまに心より感謝を申し上げます。

学生・院生のみなさんには、わがままな教員をよく支え励ましてもらうことが多かったことも心からの感謝です。

学生・院生のみなさんとは誠実に接してきたつもりですが、時間的に必要な関わりができたとはいえませんでした。それでも人間と関わるしごとにより多くの卒業生が巣立っていき、それぞれの持ち場で踏ん張っていることに勇気づけられています。

コミュニティ福祉学部での教員生活は悔いのない、また充実した人生の思い出多き期間でした。すべての出会った方々に感謝あるのみです。

19年間は思い出がいっぱいです

思い出しますと、学部開設の1998年度は当然ですが新入生ばかりでしたので、新座キャンパスの学園祭「IVY Festa」をその年に企画し、教員の私が実行委員長になりました。これはちょっと私の誇りなのですが、実際には1年生の実行委員のちからと学生課の職員さんのご尽力によって大成功したものでした。

福山清蔵学部長のもとで、事務局長としてコミュニティ福祉学会（通称：学内学会）の創設に関わりました。これまでの記念講演者とテーマの選定は、学部、学内学会の基本的スタンスを示しているといえます。

19年間はいろいろなことがありましたが、コミ福での人生のなかで、一番悲しかったことは、尾崎新先生が2010年10月1日に逝去されたことでした。コミ福の学部開設の直前に、池袋キャンパスの太刀川記念館でお会いしたのがはじめてで、いつも優しい励ましをいただけてきました。拙著を差し上げると、いつも彼らしい励ましの言葉をいただき、ある時は「社会福祉構造改革への方法論からの私なりの批判がこの本には込められているんですよ」と、『「ゆらぐ」ことのできる力—ゆらぎと社会福祉実践』（誠信書房）をいただきました。何度読み返し、また引用させていただいたことでしょうか。

1 学部1 学科時代の実習教育のあり方とハンドブックの作成のために、尾崎先生、湯澤先生と3人で語り合ったことは楽しい思い出です。学生のために、真理に誠実であることを胸に刻む日々は貴重な学びでありました。

学部開設当時に在籍されていた先生方は、三本松、濁川、沼澤、湯澤の各先生方となってしまいました。当然のことですが、学部創設の10年間とは雰囲気も変わってきました。学部の名称に込められた高邁な「コミュニティ福祉学の構想」（『新・コミュニティ福祉学入門』序章の坂田論文参照のこと）を今後とも学部の先生方には追究していただきたいと心から願っています。

人には言うにまかせよ

先人たちの言葉に次のようなものがあります。

「汝は、汝の道をゆけそして人々にはその言うにまかせよ」ダンテ「神曲」より
「汝の道を行け、しかして、あとは人の語るにまかせよ」カール・マルクス

私は心理的権力的な制約を受けることなく自由に発言をし、社会的な活動をしてきました。研究者が社会的な発信と政治的行動をするしないは、それぞれの考え方であると思いますが、私は人間として許してはならない現実・事実があることに対して、黙って研究だけに勤しむ道を選ぶことはしませんでした。できませんでしたということのほうが正確かもしれません。他人はあの人は〇〇系だとか、右だとか左だとか、社会運動をやっている人だなどと、すぐにレッテルを張る人がいますが、人には言うにまかせよ！とあきらめるしかありません。あきらめるとは、仏教用語でいうと、“あきらかに見極める”ということです。

時代と社会という書物を読むことに対して、人間として謙虚でありたいものです。私が高校時代から自らのモットーとしてきたことは、“真理に向かって忠実に生きる”でした。真理を誠実に学ぶ努力をし、我がものとしたときにどういう態度をとるのかに、まさにその人の誠実さが表れるものです。誠実さは、その人の思想と態度と行動に具現化されるものなのです。

少なくともこれだけは教員、卒業生、学生のみなさんに言い続けたいと思います。日本を戦争する国にしてはならないということを！戦後71年、戦争・戦闘に関わらなかった国は、日本とブータンだけになっています。立教大学、コミュニティ福祉学部の教職員にとって、再び学生・教え子たちを戦地に赴かせないことの決意はゆるぎないものであることを固く信じています。

人間関係を考える

どの職場、集団にも人間関係は難しい現実が横たわっています。学生のみなさん、卒業生のみなさんもさまざまな体験をされていることと思います。とくに児童養護施設の現場、大学生生活を通して体得したことのひとつは、他人は自分がその人を好きな分（嫌いな分）だけ、その人も私に対して同じように感じ思っているということです。だから努力して、その人を好きになる工夫と能力が専門家には必要だと思うのです。

つぎに、単純な二分法でいうのは不遜の誹りを免れませんが、人間には根源のところでは人間を好きな人とそうでない人がいるということです。その人は実は自分自身をも好きになりきれない人でもあるのではないのでしょうか。自己肯定感・観とは、自分自身を好きになる能力を獲得している感性と理性です。人間への確かな信頼感を獲得する努力をし続ける専門職でありたいものです。

さらに、人間にとって人間らしい関係は、笑いを共有できる人間関係にあることです。笑いを共有できる場と関係性をどう形成していくのがさまざまな人間集団の質をも規定する側面があります。笑いのある人間集団づくりに貢献できる人間でありたいものです。まずはあいさつには笑顔を添えて！を心掛けたいものです。

退職はしても研究者であり続けるために、私の決意

65歳定年は、走り続けた私にとってちょうどいい人生の転換期です。人生をアバウトに（なんとなく）、10年ごとに区切って私なりの重点を決めてさまざまな課題に取り組んできました。これからの10年はおそらくチャレンジの可能な最期の年限となると考えています。それ以上に余力を与えられれば、人生のオマケみたいなものですね。そのときやりたいことをまた考えよ～と。

大きく分けて、①沖縄戦と孤児院研究、②「戦争孤児の戦後史」研究、③セクソロジー（人性学）と性教育理論研究、④児童福祉実践論、社会的養護理論研究、⑤子どもの貧困に抗するための政策研究、⑥その他を考えています。

①は上梓した『沖縄戦と孤児院』（吉川弘文館）の研究を継続し、未着手の各地の孤児院の研究をすすめる決意です。前著では4か所の孤児院しか研究対象にできませんでしたが、あと10か所あまりの個々の孤児院研究を成し遂げる決意です。

②は、沖縄だけでなく、全国の戦争孤児の実際とその戦後の人生史の研究を、この分野の歴史研究の仲間たちと「戦争孤児の戦後史」研究会を11月26日（土）に立ち上げることにしています。この時期に残すべき課題に挑みたいと思っています。

③は、これまで約30年間にわたって関わってきた性教育の研究運動に貢献できるまとめをしたいと願っています。子どもの性的発達論研究、セクソロジー入門をまとめてみ

たいと考えています。

④は、社会的養護体系の里親制度への重点の移行、施設の小規模化への転換が政策的に図られていますが、本当に要養護児童の発達と未来への権利を保障することのできる議論でなくてはならないと考えています。そのため問題提起をしたいと考えています。

⑤は、子どもの貧困解決のための政策論の研究をすすめたいと考えています。国・自治体がこの問題の解決のための本気度が低いなかで、具体的な政策を提起し、運動で共有することが必要になっています。憲法9条は解釈改憲の状態に置かれていますが、25条の生存権は長らく実態改憲（明確に憲法で「健康で文化的な最低限度の生活」が国家責任として明記されているのに、国民の生活実態はまったく憲法上の規定とは乖離したままで放置されてきた）の状況に置かれたままになっています。子ども・若者の生存権を国民の手にするための努力を続けたいと思っています。

⑥として、沖縄の郷土誌『青い海』（おきなわ出版、1971年4月－1985年9月までの145号が発行された伝説の雑誌）に登場した人々を追跡インタビューすることを計画しています。沖縄戦から四半世紀を経過し、72年のいわゆる本土復帰を挟んだ15年間の沖縄社会の息吹と戦後の占領支配の現実を色濃く反映した内容を読み取ることができます。30年～40年を経過したなかで登場人物に再度語ってみたいと願っています。全145冊を入手していますので、ヤマトンチュとしての挑戦をしてみたいと思っています。

これからが私の人生の本史に入るのかもしれませんが。残された時間であまり欲張りなことはできませんが、ギリギリの努力を続ける決意です。カッコつけていえば、それが私の生きる道です。

最後に私事にわたって恐縮ですが、長年私が思いっきり自由に動けたのは、パートナーの裕美さんの励ましと笑顔の支えがあったからこそです。私の書いたものを読んでくれる身近な厳しい読者でもありました。あらためて心からの感謝を述べておきます。

私がかかなり以前に眺めたときに見せてあげたいと思い続けた「小樽・天狗山からの夜景」を一緒に見たいと思っています。これから少しは感謝される存在になりたいものです。